

【聖書箇所】

エレミヤ書 31:15-20

15 主はこう言われる。ラマで声が聞こえる／苦悩に満ちて嘆き、泣く声が。ラケルが息子たちのゆえに泣いている。彼女は慰めを拒む／息子たちはもういないのだから。16 主はこう言われる。泣きやむがよい。目から涙をぬぐいなさい。あなたの苦しみは報いられる、と主は言われる。息子たちは敵の国から帰って来る。17 あなたの未来には希望がある、と主は言われる。息子たちは自分の国に帰って来る。

18 わたしはエフライムが嘆くのを確かに聞いた。「あなたはわたしを懲らしめ／わたしは馴らされていない子牛のように／懲らしめを受けました。どうかわたしを立ち帰らせてください。わたしは立ち帰ります。あなたは主、わたしの神です。19 わたしは背きましたが、後悔し／思い知らされ、腿を打って悔いました。わたしは恥を受け、卑しめられ／若いときのそしりを負って来ました。」

20 エフライムはわたしのかけがえのない息子／喜びを与えてくれる子ではないか。彼を退けるたびに／わたしは更に、彼を深く心に留める。彼のゆえに、胸は高鳴り／わたしは彼を憐れまずにはいられないと／主は言われる。

1 ラケルの亡くなった土地

ルカによる福音書を順番に共に読んでおりました。が、先日、超教派の勉強会に出席し、今日のエレミヤ書の箇所に出会いました。その箇所があまりに恵み深かったので、今日は礼拝で皆さんと共にエレミヤ書31章のみ言葉を味わっていきたいと思います。

15節にある「ラマ」という地名がでてきます。ラマ村は、エルサレムの北9キロの場所にあった…と言われています。イスラエルの人々には特別の意味がありました。創世記に出てくるヤコブの妻、ラケルが亡くなった土地であるという言い伝えがあるからです。ヤコブはラケルを深く愛していました。彼女を妻にするために、伯父ラバンのもとで14年間もの苛酷な労働に耐えたくらいです。その愛してやまない妻が、二番目の子どもを出産する時に難産で亡くなったのです。ラケルの死の苦しみが如何に激しかったかは、生まれた子に「苦しみの子」という名前をつけるほどでありました。

ラケルは死にました。ヤコブは深く嘆き悲しみます。ですが、彼には子どもが残された。嬰兒の上に愛するラケルの面影を認めたのでしょうか、ラケルが「苦しみの子」と名付けた男の子を、ヤコブは「幸いの子」という名前に変えます。それが十二部族の一つ、ベニヤミン族の始祖ベニヤミンです。ヤコブは、その後、その地に記念碑を立てて、愛する妻を偲んだと聖書は伝えます。その場所がラマであった…と創世記にはありませんが、ラマ村にある石積みヤコブがラケルの為に建てた記念碑だ…と人々は考え語り伝えました。やがてラマはイスラエルの人々にとって自分達の信仰の父、母を記念する地、信仰者たちの巡礼の地となります。

2 イスラエルの歴史

ヤコブの時代から歳月は流れます。イスラエルの祖先たちは飢饉から逃れてエジプトに移住します。ヤコブの息子ヨセフがエジプトで宰相をしていたからです。しかし、ヨセフの死後、時を経るうちにイスラエルの人々はエジプトで奴隷として酷使されるようになります。民族存続の危機の中、イスラエルはモーセに導かれ、エジプトを脱出し、荒れ野を四十年さまよいますが、遂にヨシュアに導かれて、神の約束の地、カナン地方へと戻ってきました。人々の先頭には神があつてさまようイスラエルの人々を導いた…と聖書は語ります。

やがて時代はくんだり、紀元前1000年になると、神に選ばれたダビデが王として統一国家をつくり、勢力を誇りました。しかし、この統一国家はダビデの孫の時代には北イスラエル王国と南ユダ王国に分裂します。

ダビデの国からわかれた南北二つの王国はそれぞれの道をたどります。北イスラエルはクーデターが頻発し王がしょっちゅう変わる不安定な政治状況が続きましたが、経済的に隆盛を誇る時代もありました。そして紀元前 721 年、アッシリアによって滅ぼされます。エレミヤ書の時代よりも 140 年ほど前のことです。

3 バビロン捕囚

南ユダ王国は北王国と比べて政治的には安定していました。代々、ダビデ家の子孫が王位を継いでいたからです。しかし、その内情は神の御心に沿ったものとはとても言えませんでした。人々は富や反映を求めて神ならぬ神々を礼拝し、富める者が貧しい者、弱い者の権利を蔑ろにする社会となっていました。そして、紀元前 6 世紀、バビロニア帝国が南ユダ王国に攻め寄せてきたからです。

この時、南ユダ王国の指導者達は、神のみ旨に反していた自分達の過ちを悔い改める事はありませんでした。寧ろ、「神の民の国が亡びる筈がない。万軍の主が私たちの味方だ。神は必ずバビロニアを撃退してくれる」という自分達に都合のよいこと、耳に心地よい事を語る偽預言者の言葉を鵜呑みにするのです。神を神とするのではなく、自分達を神とし、神を使用人のように自分達に都合よく使おうとしたのです。

結局、南ユダ王国は、バビロニア帝国との戦いに敗れ、王侯貴族や職人達など国の主だった人々、優れた技能を持つ人々がバビロニア帝国の首都、バビロンに連行されます。第一次バビロン捕囚です。今日のエレミヤ書の箇所は、その頃、エレミヤを通じて語られた神の言葉だと言われています。

4 ラマバビロン捕囚の中継地

このバビロン捕囚の時に、ラマという土地が、再び歴史の表舞台に再び登場します。バビロニア帝国が、エルサレムに近いこのラマを捕囚の民を集める中継基地としたからです。着のみ着のまま、鎖をかけられ、故郷を追われる人々。イスラエルの人々にとっての巡礼の土地が悲しみの土地へと変わります。鎖に繋がれた人々がラマに集められます。彼らはここで一定の人数になるまで留め置かれ、やがて神を知らぬ土地、異教の神々の土地へと追い立てられていくのです。人々の嘆きはいかばかりだったのでしょうか。人々は泣きながら、ラマから旅立っていきました。

その様子をエレミヤはヤコブの妻、イスラエル民族の象徴的な母、ラケルの嘆きとして歌います。「ラマで声が聞こえる／苦悩に満ちて嘆き、泣く声が。ラケルが息子たちのゆえに泣いている。彼女は慰めを拒む／息子たちはもういないのだから。」慰めがなんの役に立とうか。なんの力を持とうか。イスラエルには未来はない。息子達、娘たちが、父の手から父母の手から奪われて去っていく、神なき地へと連れられていく。子どもの居場所であった父母の腕の中は虚しい。父母は二度と子ども達の顔を見る事も声を聴く事も、体の温かさを知る事もないだろう。子どもという未来の希望を奪われ、残されたイスラエルはただこの地で悲嘆の内に草のように滅び、塵に返るのみ。

5 「涙を拭いなさい」

嘆き悲しむイスラエルの民、自分達の未来を奪われ、無力に打ちひしがれたイスラエルの人々に、主なる神が自ら仰います。「涙を拭いなさい」。「あなた達の未来には希望がある」。

この言葉は、わたし達に、ルカ福音書7章、主イエスがナインのやもめの話を思い出させます。ナインという町のやもめの一人息子が死んでしまいます。その棺を担ぎ出しているところに行き合わせた主イエス。やもめは大勢の人に囲まれていた…と聖書は語ります。しかし、多くの人の慰めもやもめには届きません。慰められる事を拒み、彼女はずっと泣いて悲しんでいました。

その様子を見た主イエスは、「憐れに思った」とあります。可哀そうに…とご自分で思ってください、声をかけます。「もう泣かなくともよい」と。主イエスが棺に手をかけると息子は起き上がってしゃべり始めた、その息子を母親にお返しになった…というのがナインのやもめの物語です。嘆き悲しむ母親に主イエスの方から近づき。その悲しみをご自身の悲しみとしてくださる主イエス。当時の社会のやもめ、未亡人は、経済的にも社会的にも支えてくれる夫を失った者です。経済的にも社会的にも不安定な存在、頼りない惨めな存在でありました。

ですが、そのような弱く小さい存在に、聖書の神は目を注ぎ、近づき、未来の希望を現実のものとしてくださいます。主イエスは、「死」という人間の力を超えるものの虜になった息子を、聖なる力により、母のもとへと取り返してくださいました。再び命を与えてくださったのです。バビロンへと連れ去られたイスラエルの民、神の御前をさまよい出た故に当然の結果として滅びるしかなかった者達を、その手で取り戻してください！と仰るエレミヤ書の神の言葉と主イエスの言葉が響きあいます。

わたし達人間は、未来を様々に思い描きます。しかし、未来を作る決定的な力はありません。様々な事をコントロールできる力は人間にはありません。それを私たちは忘れてしまいます。そんな未来に力を持ちえない人間が語る言葉は気休めにすぎません。そこに人を真実に立ち上がらせる力はないのです。

しかし、真実に希望ある未来を確実に実現する力のある唯一のお方がいらっしゃいます。このお方こそ、人の罪、自分の罪、この世の罪の結果、傷つき疲れ果てて失意の底で打ちひしがれた人々に声をかけてくださるのです。

6 悔い改め

神が「あなたの涙を拭きなさい」「あなたの未来には希望がある」と呼びかけてくださるのを聞いて、人々は初めて自分の過ちに気づきます。神の慰めに満ちた語り掛けを聴いて初めて、わたし達は、父なる神から離れ去っていた事に目が開かれるのです。それは、神の御前にいるべき本来の自分に気づく…と言ってもよいでありましょう。それで18節から19節のように祈るのであります。「神はわたしを懲らしめ／わたしは馴らされていない子牛のように／懲らしめを受けました。どうかわたしを立ち帰らせてください。わたしは立ち帰ります。あなたは主、わたしの神です。19 わたしは背きましたが、後悔し／思い知らされ、腿を打って悔いました。わたしは恥を受け、卑しめられ／若いときのそしりを負って来ました。」

私を立ち帰らせてください！あなたのもとに…と祈るこの部分を読むと、ルカによる福音書の放蕩息子の譬えを思い出します。財産を先にもらって外国に行った弟息子。あっという間に使い果たしてしまいます。弱り目に祟り目で飢饉が襲う。息子は、なんとかユダヤ人が忌み嫌う豚の世話の仕事にありつきます。しかし、その豚の餌さえも狙うほどにお腹を減らします。息子は、父親の家を思い出し、父にあやまって使用人として使ってもらおうと故郷への道を歩みだします。この時、息子は自分の罪に本当には気づいてはいなかったでしょう。ただただお腹が減っていた、惨めで孤独であった、このままでは生きていけない。だから父親を思い出したにすぎません。

しかし、父親は息子が戻って来るのを一日千秋の思いで待っていました。まだ息子の姿が遠くに小さく見えるにすぎないのに、自ら駆け寄って息子を抱きしめます。父は息子を「憐れに思った」とあります。自分を抱きしめる父の腕の力、体のぬくもり、父の胸の鼓動を聞いて初めて、この息子は如何に自分が父の愛を踏みにじっていたか、いかに自分が罪深かったのか…に気づかされました。そして、父親と神に罪を犯したことを素直に認めるのです。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません」と。ここでも、敵地のただ中バビロンにあった南ユダ王国の人々が、「どうかわたしを立ち帰らせてください。わたしは立ち帰ります。あなたは主、わたしの神です。19 わたしは背きましたが、後悔し／思い知らされ、腿を打って悔いました。わたしは恥を受け、卑しめられ／若いときのそしりを負って来ました。」と父なる神に祈る言葉と放蕩息子の言葉が響きあいます。

7 胸は高鳴る

この神の民の告白を聞いた時、神の胸は高鳴る…とエレミヤを通じて父なる神は仰います。20節です。「エフライムはわたしのかけがえのない息子／喜びを与えてくれる子ではないか。彼を退けるたびに／わたしは更に、彼を深く心に留める。彼のゆえに、胸は高鳴り／わたしは彼を憐れまずにはいられないと／主は言われる。」

エフライムというのは12部族のうちでも有力な部族の名前でイスラエルの人々のことを代表して言う時に使われています。また、「胸が高鳴る」という部分を直訳すると、「わたしの腸（はらわた）は音をたてる」になります。腸（はらわた）というのは、人の感情が宿るところ…とイスラエルでは考えられていました。神はイスラエルの人々の故に、大きく感

情を高ぶらせるのです。それほどにイスラエルに対する神の思いは深く大きく、彼らの事を語るとき、思う時、神の思いは音をたてあふれ出す。彼らを憐れまずにはおられない…といえます。こみあげる熱い想いをこめて父なる神は呼びかけ続けます、「私のもとに帰ってこい」と。

8 かけがえのない子としてくださる父なる神

神が「あなたはわたしのかけがえのない子」として、「あなたはわたしに喜びを与える子」と呼びかけてくださるとは。その愛の深さに私たちは圧倒されます。「沢山の人間がいる、数え切れないほどの人間がいる。しかし、あなたはあなたしかいない、あなたの代わりなど誰もいない。かけがえのない者としてくれる父であるわたしのもとでこそ、あなたは、本来のあなた、私に喜びを与える子になれるのだ」。それも父なる神に従順な子どもではありません。人間は父なる神に背いて敵対して生きる存在なのです。しかし、その人間を「失われた子ども」として愛してくださるのが父なる神である。天地万物を創られたお方の愛が深く大きく広いものであるかが、この言葉に凝縮しているようです。

エレミヤが語るようにと、神から託された、神の深い愛。私たち人間を一人一人を愛するが故に、わたし達が罪を犯した時は厳しく叱り、罰する愛。しかし、だからこそ、わたし達を創りあげる父なる神の愛なのです。この父なる神の愛こそが私たちの救いです。父なる神のみもと以外に私たちが生きる道はない…と聖書は語ります。

9 イエス・キリスト

それが最もはっきりと示されたのが、御子イエス・キリストの十字架と復活です。ご自身と一心同体の御子を十字架の上に究極的に滅ぼしてまで、神がその腸が裂けるほどに苦しまれてまでも、わたし達を救いたい！と熱望されたのです。神の御子も父なる神の言いつけに徹底的に従われました。

10 神々が集う場所バビロン

南ユダ王国は第一次捕囚のあと十数年後にバビロニア帝国によって完全に滅ぼされ、エルサレムもエルサレム神殿も徹底的に破壊されました。そして今度は生き残った南ユダ王国の殆どの人々がバビロンへと連れていかれます。第二次バビロン捕囚です。

バビロンは当時、世界一の大都市。世界中から様々な文化が流れ込んでくるつぼのような町。文化とともに実に多様な神々も集まってきた土地。聖書の神以外の神々が崇められる土地。異教の民の壮麗な神殿がそびえたつ町バビロン。

その中であって、イスラエルの人々は、70年近く捕らわれの身にありました。世代が交代するような長さです。しかし、聖書の民は自分達の神への信仰を捨てませんでした。そして、エルサレムにおいては外的外れでありあやふやであった信仰、神への信仰の本質ととらえなおし、信仰を固くするのです。異教の神々の中であって聖書の神こそまことの神だという確信を得ます。これは古代世界では異常なことでした。何故なら、古代世界の神々は国家の守護神です。国が滅びた後も尚、人々が信仰し礼拝し続ける神々はいませんでした。国が滅びれば神々も滅びるのが常識。それが証拠に当時の神々で現

代世界にまで残っているものはありません。聖書の神が唯一の例外です。それは、聖書の神がまことの神であることの証ともいえます。

11 人々を救った礼拝

しかし、異教の地、文明のるつぼバビロン、世界中の神々が集うバビロンで、どうしてイスラエルの人々は信仰を守り抜く事ができたのでしょうか。どうして、絶望の中にも「涙を拭きなさい。あなたの未来には希望がある」という神を見出したのでしょうか。彼らには壮麗な神殿などなかったのです。人数も少なく、社会的にも弱い捕らわれの民。嘲笑され差別され続けてきました。信仰にとっては厳しい状況であった事が詩編137篇から伺えます。「バビロンの流れのほとりに座り／シオンを思って、わたしたちは泣いた。堅琴は、ほとりの柳の木々に掛けた。わたしたちを捕囚にした民が／歌をうたえと言うから／わたしたちを嘲る民が、楽しもうとして／「歌って聞かせよ、シオンの歌を」と言うから。」

しかし、イスラエルの人々はどのように差別されようとも、嘲笑されようとも、バビロンにあって、神を礼拝し続けました。この礼拝が、イスラエルの人々を守った…と言われていきます。バビロンの礼拝で、敵地のまっただ中で、立派な神殿や会堂のない中でも、神を礼拝し続けたから。礼拝が絶望のどん底にあった人々を救ったのです。

12 悔い改めの礼拝

では、それはどのような礼拝であったのか？ 実は今日のエレミヤ書の18節から20節は、バビロニアで捧げられた礼拝のもとになった…という研究者がいます。つまり、人々は自らの罪を悔い、「神に立ち帰らせてください」という悔い改めの祈りを捧げ、「あなたは主、わたしの神です」という信仰告白がそれに続きます。捕らわれの民は、このような悔い改めの祈りの礼拝をささげる事によって、自分達に降りかかった神の裁きのより深い意味まで理解したのであります。放蕩息子に、神を礼拝する場所で、神の霊に包まれて、自分の非を認め、自分に差し出された神の手を信仰告白を通して掴んだのです。このことが、神の御前に立ち帰り信仰告白する事が、イスラエルの人々、信仰者たちに困難を乗り越えて生きる力を与えました。

それは、礼拝で、彼らが父なる神の応答をきいたからでしょう。罪を悔い改めて、父なる神の御前に立ち帰る時、「あなたはわたしのかけがえのない子ども、喜びを与えてくれる子ども」という言葉を聴き、心に刻み付けたのです。繰り返し繰り返し聴き、この言葉に生きたのです。それが、現実には神のかけがえのない子として生きる力、神が喜ぶ子としての命を彼らに与えました。そしてバビロニアでの70年近い捕らわれの歳月を神により頼んで希望をもって暮らしていく事ができたのです。神はイスラエルの人々の未来を、礼拝を通じて切りひらき、確かな希望を与え続けたのです。

13 わたし達の礼拝

それはわたし達も同じです。私たちもまた、キリスト者は1%以下という異教社会である現代日本に住んでいます。普段はそれぞれの場所で神ならぬものが力を振るう社会の中で生活しています。そして週に一度、わたし達はこの会堂に集まってきて、御子イエ

ス・キリストの十字架のもとに礼拝します。礼拝は、罪ある私たちに、神の霊を注ぎ、聖書の神を「父なる神」と呼ぶ者達と変えるのです。父なる神の胸の中で、その胸の高鳴りを聴くからです。この父なる神の愛こそ、私たちの罪をきよめ、弱く力乏しい私たちに力を与え、愛の少ない私たちを、神の愛で満たし、神の子としてこの世の生活へと送り出しています。私たちは礼拝において、神の子となり続けるのです。

私たちは、2500年前のイスラエルの人々と同じように、礼拝を通じて神によって切りひらかれる神の子としての未来を生きる者とされます。私たちが今行っている礼拝に、礼拝をささげるといふその事に私たちの命がかかっている…と言っても過言ではないと思います。

横浜ナザレン教会では再来週の礼拝、5・6に教会総会を持ち、本年度の活動計画をみんなで話し合います。どんなイベントをしようとも、そのイベントにどれだけ多くの人が来ようとも、教会の活動の中心は礼拝であること、礼拝に人を招くためのイベントである事を忘れずにいきたいと思ひます。

そう私たちはもう自分自身のものではありません。神のもの、神の子ー差し出された神の手を信仰告白によって掴み、神を礼拝する者達です。確かに、わたし達には弱さがあり、肉の思いがあり、自分が神の喜ばれる子である事をすっかり忘れてしまいます。しかし、わたし達が忘れていようとも、父なる神が忘れることはありません。喜び薄い日であったとしても、悲しみの影が覆う日であったとしても、病の中力弱く横たわる日であったとしても、全てのことが退屈に思えるような日であったとしても、憎しみに引きずり回されそうな日であっても、どんな日でも、先ず、父なる神のみ名を呼び求め、神を礼拝する日としたい…と切に願ひます。